

## 小林秀雄「Xへの手紙」試論

権田和士

周知の様に、小林秀雄は「様々なる意匠」(29・9)により文壇に登場し、翌年の四月から、『文芸春秋』の文芸時評欄を一年間担当したことで、批評家としての地位を確立した。しかし、当時の小林は、「私は嘗て批評で身を立てようなどは夢にも思つた事がない、今でも思つてゐない。文芸批評といふものがそんなに立派な仕事だとは到底信ずる事は出来ぬ」「批評は己れを語るものだ、創作だ、などと言つてみるが、所詮得心のいくものぢやない」(「感想」30・12)と公言していたように、批評家としてではなく小説家として立とうとしていた。

この点については、『文芸春秋』で月評をやつてゐる頃彼は、オレは一年間月評であればたら、後は誰が何といつても小説を書くんだ、といつてゐた<sup>(1)</sup>との証言が河上徹太郎にある。事実、小林は『文芸春秋』の連載の終わつた一九三一年に、「眠られぬ夜」(『古東多万』31・9)と「おふえりや遺文」(『改造』31・11)を發表している。小林が小説の筆を断ち、批評に専念するのは、「Xへの手紙」(『中央公論』32・9)以後のことである。本稿では、この小林の最後の小説「Xへの手紙」の分析を通して、小説家としてではなく文芸時評家として文壇に登場してしまつた小林が、自らを批評家として再構成していく過程を辿り、併せて、小林の批評方法についても検討したい。

(I) 語り手と作者

「この世の真実を陥穽を構へて捕へようとする習慣が身についてこの方、この世はいづれしみつたれた歌しか歌はなかつた筈だつたが、その歌はいつも俺には見知らぬ甘い欲情を持つたものの様に聞えた。で、俺は後悔するのがいつも人より遅かつた。と俺は嘗て書いた事がある。今君に少し許り長い手紙を書かうと思ふ折からふとこの言葉を思ひ出した。どうもよくない傾向だと思ふ。以前書いた自分の言葉をふと思ひ出すなどとは、どうせ碌なことではない。」

「Xへの手紙」はこのように語り始められている。冒頭の一節は、小林の最初の著作集『文芸評論』(31年刊)に収められている「批評家失格」(31・2 現行題「批評家失格Ⅱ」)における、「この世の真実を、陥穽を構へて、捕へようとする習慣が、私の身について此方、この世は壞血症の歌しか歌はなかつた筈だつたが、その歌は、いつも私には、美しい、見知らぬ欲情も持つてゐるものと聞えたのだ。／＼で、私は、後悔するのが、いつも人より遅かつた」という文章を踏まえたものである。

また、「俺」は「探る様な眼を向けた処でなんの益がある。俺が探り当てた残骸を探り当てて一体何の益がある」「和やかな眼だけが恐ろしい、何を見られてゐるかわからぬからだ。和やかな眼だけが美しい、まだ俺には辿りきれない、秘密をもつてゐるからだ」とも語っているが、これも同じく『文芸評論』に収められている「批評家失格」(30・11 現行題「批評家失格Ⅰ」)で語られていた「探る様な眼はちつとも恐かない、私が探り当てて了つた残骸をあさるだけだ。和やかな眼は恐ろしい、何を見られるかわからぬからだ」という小林の発言の反復といつてよいものである。

さらに、「人並みに卍になつて、はじめて自分の凡庸がしみじみと腹に這入つた」「君も知つてゐる通り、いつとは知らず俺は文学に関する批評文を製造して口を糊するまはり合はせとなつてゐる」という記述も、作者である小

林自身の当時の年齢・職業に正確に対応している。

この小説の語り手「俺」と批評家小林秀雄とが重ねられていることは明らかであるが、批評家小林秀雄が一人称で語るといふ設定は、同時代の読者にとって、「Xへの手紙」を「小説」として読むことを困難にしていた。例えば、発表当時、杉山平助は「友人に宛てた思想的独白とも云ふべきもので、小説として創作欄に組こむのがもと／＼間違つたシロモノ」と評し、河上徹太郎も「小説といつていいかどうか判らないもの」とジャンルに関する疑念を表していた。ジャンルに関する同時代の困惑は、このテキストの重要な性格を示唆していると考えられるが、戦後になると、「Xへの手紙」を「思想家の私小説」とし「日本の私小説形式」を「拡大し爆破した」という見解が大岡昇平によって提示される。「Xへの手紙」を小説として受け取り、かつ私小説形式のパロディをそこに読みとるものである。

大岡の読みをさらに分析的に展開したのが中村光夫である。中村は、「Xへの手紙」について小説か評論か疑問があるとした上で、この作品について「小説のボーダーラインを目ざした」という判断を示し、「たしかに小説的な性格は、この手紙の宛先である『X』という人物がまったく架空の人物であることです。宛名が架空であれば、それにたいして手紙を書く筆者も、いくぶん仮構の存在になるわけです」という理解を示している。「いくぶん」という形容が曖昧だが、中村の主張は小説の語り手「俺」と生身の作者小林秀雄とが異質の存在であることを、小説理論の側面から指摘したものである。この小説の語り手「俺」にとって「君」は実在する人物であり、また叙述もその「君」に向かって「手紙」として書かれているのに対し、生身の作者小林にとっては「手紙」も「君」も仮構されたものであり、小林の現実と異なる水準にあるからである。従って、その仮構の枠の中で叙述する主体である「俺」も、「手紙」や「君」と同様に、仮構された存在であるほかない。確かに「俺」は限り無く作者小林に似せて設定されているとしても、小説に実現されている語りの性質上、「俺」は「生身の小林秀雄」とイコールとはなりえない、という論理である。

「Xへの手紙」が「たしかに小説」である、ということの中村は論証してみせたわけだが、その論理は、小説の定義を言説の仮構性にもとめつつ、仮構概念の拡大により小説概念を拡大したうえで、小説としての地位を与えるというものであった。そして、その後再び、「俺」を「抽象化された精神としての作者」として、語り手を作者と重ね合わせて、「精神の私小説」という位置を与えたのである。

「Xへの手紙」の小説としての性格は、中村のこの理解によってほぼ定められたといつてよい。この後「Xへの手紙」は、少数の例外を除いて、ジャンルに関する疑惑が提出されることはなくなり、替わって「私小説」性が強く意識されるようになった。ただし、大岡や中村によって与えられたこの小説の「私小説」性は、反転して「俺」の仮構性を浸食させかねないものであった。事実、関谷一郎氏は「Xへの手紙」が小説であることについては疑いを示さないものの、「語り手の『俺』は生身の小林秀雄と等身大である」という判断の下に、「私小説の克服という観点」に立って、「Xへの手紙」に「おふえりや遺文」からの「後退」を読みとっているし、榎原修氏も「この物語の向うに透いて見えるのが小林自身の生身」であり、「小林のとった〈方法〉は、作品を構造化するためのものではなく、言わば作者の告白への含羞を隠すものでしかない」との理解を示している。両氏は、このような論理を展開する際に、「俺」と「生身」の小林とをさりげなく重ね合わせているが、その時、大岡の私小説形式の破壊という理解を支えていたはずの思想家の「私小説」という限定がはずされ、中村が「精神の私小説」という概念を提示する際に、その対抗概念とした「生活の私小説」との混同が生じている点は注目し値する。こうした混同は、大岡や中村が「小説」概念を拡大するとともに、結果として「私小説」概念をも拡大したことを示しているからである。<sup>(9)</sup>

要するに、「Xへの手紙」の語り手「俺」は批評家小林秀雄という設定は、同時代の評者達に対しては、小説ジャンルから逸脱する指標となり、小説として読まれることを困難にしていたのであるが、近年の評者達に対しては、小説として受け取れることを拒ませはしないものの、叙述内容の事実性・非虚構性の指標となり、小説の主人公と生

身の作者とを同一視するような「私小説」的読みを生産させる原因となっているのである。

しかし、語り手「俺」と批評家小林秀雄との同一性が繰り返し示され、小林の書いた批評テキストまで参照されている一方で、この小説では「俺」の生活に関する具体的情報はまったく欠けている。つまり、小説の語り手「俺」と「小林秀雄」との関係は、批評家小林秀雄<sup>II</sup>「俺」<sup>II</sup>生活者小林秀雄、と図式化できるものとなっているのである。こうした語り手と「小林秀雄」との関係は、「Xへの手紙」が小林の実生活とは不連続であると同時に、小林の批評テキストとは連続していることを示している。言い換えれば、この小説においては、小説の言語も批評の言語もともに生活者としての作者と水準を異にする領域の言語であることが示され、同時に小説と批評というジャンルの境界が無化されているのである。この点で、「Xへの手紙」は、読者の制度的ジャンル意識を挑発するものを孕んでおり、同時代の読者が小説か批評かにとまどったのも尤もなことであったのである。

## (II) 小説から批評へ

「俺」と批評家小林秀雄との同一性を小説の冒頭部で明示した後、語り手は、写りの良すぎる「姿見」によって性格を紛失した経験について語り始める。

「なんのことわりもなくカメラ狂が一人俺の頭の中で同居を開始した。叩き出さうと苛立つごとに、彼は俺の苛立つた顔を一枚づつ撮影した。疲れ果てて観念の眼を閉ぢても、その愚かしい俺の顔はいつも眼前にあつた。

複雑な抽象的な思案に耽つてゐようと、たゞ単に立小便をしてゐようと、同じ様にカメラは働く。凡そ俺を小馬鹿にした俺の姿が同じ様に眼前にあつた。俺にはこの同じ様にといふ事が堪へられなかつた。何を思はうが何を為ようが俺には無意味だ、俺はたゞ絶えず自分の限界を眼の前につきつけられてゐる事を感じた。夢は完全に現実と交錯して、俺は自分の為る事にも他人の言ふ事にも信用が置けなかつた。」

具体的な出来事の記述には欠けるものの、この回想が明かしているのは、自分の姿を明らかにしようとして働き始めた自意識が止むことのない自己解析を開始し、自己像が合わせ鏡に映る像のように虚の焦点に解消されてしまう自己解体の経験である。そうした状態から語り手は、さらに「懸命に何かを忍んでゐる、だが何を忍んでゐるのか決してわからない。極度の注意を払つてゐる、だが何に対して払つてゐるのか決してわからない」というような、対応する現実を持たない空虚な感覚の中をさまよい、「生きようと思ふ心のうちに、何か物理的な誤差の様なもの」を感じ、「自殺のまはりをうろつ」く事態にいたる。この経験について、語り手は次のような奇妙な告白をしている。

「俺は今までに自殺をはかつた経験が二度ある、一度は退屈の為に、一度は女の為に。俺はこの話を誰にも語つた事はない、自殺失敗談くらゐ馬鹿々々しい話はないからだ、夢物語が馬鹿々々しい様に。力んでゐるのは本人だけだ。大体話が他人に伝へるにはあんまりこみ入りすぎてゐるといふより寧ろ現に生きてゐるぢやないか、現に夢から覚めてるぢやないかといふその事が既に飛んでもない不器用なのだ。俺は聞手の退屈の方に理屈があると信じてゐる。」

自殺失敗談の馬鹿馬鹿しさをいいつつも、自らの自殺未遂を語っているこの部分は、自己言及文がその文自体の意味を破壊する、例の「私は嘘つきだ」という文に代表される嘘つきのパラドックスと同様の構造を持っている。自己告白という語りの形式が孕む矛盾を示し、告白形式に対する懷疑を生産しているのである。しかも、この小説は、語り手自身の文章の引用とその引用行為に対する自注から語り始められ、「ではさよなら。君が旅から帰る日に第一番に溜りで俺と面会しよう。俺は早くから行つて君を待つてゐる。だが俺が相変らず約束をうまく守れない男である事を忘れてくれるな。俺は大概約束を破つて了ふ様な事になるだらうと心配してゐる」という意識家の自嘲的な叙述で閉じられている点に露わなように、徹底して自己言及的な叙述から成っているのである。

この事実は、「Xへの手紙」のディスクールの総体が自己言及文のパラドックスの中に投げ込まれていることを

示しているが、嘘つきのパラドックスに代表される自己言及文の特徴は、対象言語であるテキスト自身(10)の内部でその意味を確定させることが不可能な点にある。ここで、「俺」は批評家小林秀雄という語り手の設定によって示されている「批評家小林秀雄(11)という枠」が重要な役割を果たすことになる。この「批評家小林秀雄」というテキスト外部の参照枠によって、自殺失敗談に続けて語られている恋愛論は、単なる語り手の恋愛観の提示とは異なる意味を立ち上げるからである。

「俺は恋愛小説を書く才能を持つてはゐないし、それに自分のしでかした事件の顛末を克明に再現しようといふ、或る種の人々の持つてゐる奇妙な本能を持つてゐない」と、私小説批判めいた発言によってその具体的事実の報告を忌避しつつ、恋愛観を語り始める。そしてその際に、「俺はよく考へる。俺達は皆めいめいの生まましい経験の頂に奇怪に不器用な言葉を持つてゐるものではないのだらうか、と。たゞさういふ言葉は当然交換価値に乏しいから手もなく置き忘れられてゐるに過ぎない。(中略)とまれ小説を書かうと思つて書かれた小説や、詩を書かうと思つて書かれた詩の氾濫に一切の興味を失つて了つた今、俺は他人のさういふ言葉が、俺の心に衝突して行く極めて稀れな機会だけを望んでゐると言つていゝ」と語り、記号化を拒む言葉の発生場として恋愛経験が位置づけられ、批評対象とするに足る言語表現の出現を渴望する語り手の期待が示されている。恋愛に関連して、小説や詩についての価値判断という文芸批評に関わる意識が呼び起こされているのである。さらに続く場面で、恋愛関係の中で行われる自他の認識について、次のような考察を「俺」は披露する。

「俺は恋愛の裡にほんたうの意味の愛があるかどうかといふ様な事は知らない、だが少くともほんたうの意味の人と人との間の交渉はある。惚れた同士の認識が、傍人の窺ひ知れない様々な可能性を持つてゐるといふ事は、彼等が夢みてゐる証拠とはならない。世間との交通を遮断したこの極めて複雑な国で、俺達は寧ろ覚め切つてゐる、傍人には酔つてゐると見える程覚め切つてゐるものだ。この時くらゐ人は他人を問近かで仔細に眺める時はない。あらゆる秩序は消える、従つて無用な思案は消える、現実的な喜びや苦痛や退屈がこ

れに取つて代る。一切の抽象は許されない、従つて明瞭な言葉などの棲息する余地はない、この時くらゐ人間の言葉がいよいよ曖昧となつていよいよ生き生きとして来る時はない、心から心に直ちに通じて道草を食はない時はない。惟ふに人が成熟する唯一の場所なのだ。」

「俺」の理知的な自己解析が、現実から徐々に遊離して行き、事実を確定する力を失い、思考や感覚自体の空虚感をもたらしたのとは対照的に、恋愛状態にある人間の認識は、他人からその現実性を疑われようと、本人達の交渉に根付いており、その現実感が失われることはない、とされている。そして、恋愛感情とともに他者へと向けられる言葉は、通常の記号的意味以上の負荷が加えられ、意味を確定することは困難ではあるが、しかし無意味や混乱とも異なる「生き生き」としたものであるという。恋愛は優れた言語経験の場として位置づけられているのである。

ここで、「Xへの手紙」に七ヶ月先だつて発表していた「批評について」(32・2)を参照してみよう。先に確認したとおり、この小説は、テキスト外部の批評家小林の発言を参照することを拒否しない、むしろそれらを積極的に参照することを期待しているテキストだからである。そこには、次のような、「Xへの手紙」で語られている恋愛観とほぼ重なる発言が見られる。

「人々は批評といふ言葉をきくと、すぐ判断とか理性とか冷眼とかいふことを考へるが、これと同時に、愛情だとか感動だとかいふものを、批評から大へん遠い処にあるものの様に考へる、さういふ風に考へる人々は、批評といふものに就いて何一つ知らない人々である。」

この事情を悟るには、現実の愛情の問題、而もその極端な場合を考へてみるのが近道だ。(中略)  
恋愛は冷徹なものぢやないだらうが、決して間の抜けたものぢやない。それ処か、人間惚れ、ば惚れない時より数等利口になるとも言へるのである。惚れた同士の認識といふものには、惚れない同士の認識に比べれば比較にならぬ程、迅速な、澁刺とした、又独創的なものがある筈だらう。(中略)

理知はアルコオルで衰弱するかも知れないが、愛情で眠る事はありません、寧ろ普段は眠つてゐる様な可能性が目醒めるとも言へるのだ。傍目には愚劣とも映ずる程、愛情を孕んだ理知は、覚め切つて鋭いものである。」

恋愛についての考察は「Xへの手紙」と近似しているが、「Xへの手紙」では恋愛は批評対象とするに足るような魅力的な言語表現を発生させる場所として期待されていたのに対し、このエッセイにおいては、批評のモデルとして、鋭敏な理知と独創的な認識の発生場として、提示されている。ここに示されている小林の批評観は、「感想」(30・12)で述べられていたかつての否定的言辭に比べて、肯定的であるばかりでなく、「様々なる意匠」以来の小林の批評意識に大きな転換が生じていたことも示している。

かつて小林は「様々なる意匠」で、「批評の対象が己れであると他人であるとは一つの事であつて二つの事ではない」と自己表現としての批評の可能性を語り、芸術作品の中を彷徨することは、「解析によつて己れの姿を捕へようとする彷徨に等しい」と述べていた。しかし、この「様々なる意匠」の高らかな宣言には、批評という他者に向けた理知の発動は、自己に向けた理知の発動と同様である限りにおいて肯定できるものに過ぎない、という小林の批評意識も同時に表れている。だから、「様々なる意匠」で述べられていた批評の可能性は、裏返せば、「批評は己れを語るものだ、創作だ、などと言つてみるが、所詮得心のいくものぢやない」(「感想」というように、いとも簡単に否定に転じてしまうものでもあった。

しかし、先に見た通り「批評について」(32・2)の時点での小林は、批評を他者に対する愛情を核とする認識行為として全面的に肯定するテキストを公表している。「感想」(30・12)と「批評について」(32・2)の間には、小林の批評に対するこのような態度変更があったのである。

小説家志望時代の小林が「Xへの手紙」に至るまで発表してきた小説は、小林が自身の全集に収めることを最後まで拒否した三人称形式の「蝟の自殺」(「登音」22・11)を除くと、初期の「一つの脳髓」(「青銅時代」24・7)

以来、すべて一人称の自己語りの形式が採用されている。そして、「Xへの手紙」の語り手が回想する、かつての求心的な自己追求の試みは、「一つの脳髓」から「おふえりや遺文」へと徐々にその抽象度を高めていった一人称小説の主人公達とも共通するものである。従って、孤立した自意識による自己解析に生産性を認めずに、他者との交渉の場としての恋愛を称揚する「Xへの手紙」の叙述は、過去の小林自身の小説表現に対する批判としても機能することになる。

換言すれば、「Xへの手紙」は作者の文学的履歴を回顧しつつ、小林が取り組んできた一人称の自己言及小説の破産を語る一方で、他者に対する認識に関わる言語行為である批評の可能性に対する確信を語ったテキストということにもなるだろう。<sup>(12)</sup>

### (Ⅲ) 言語の流通と思想の再生産

以上述べてきたように、「Xへの手紙」には、小説から批評へと作者の文芸ジャンル転換の意志をみる事ができるが、続いて、この小説に示されている「俺」の言葉に関する見解について考察していきたい。

「俺」は、恋愛を優れた言語経験の場として捉えていたが、思想についても、優れた思想は言語表現の危機に面接し、意味を固定し難い頂を持つと言い、次のように述べている。

「この世に思想といふものはない。人々がこれに食ひ入る度合だけがあるのだ。だからこそ、言葉と結婚しなければこの世に出る事の出来ない思想といふものには、危機を孕んだその精髓といふものが存するのだ。」

ここで「俺」は、思想を言語との相対性において捉えているが、このような思想と言語との関連についての認識も、早く「アシルと亀の子IV」(30・7)において、「最初に言葉が語られたといふ事実があつた。これは、精神が言葉に捕へられる事によつてのみ明るみに出たといふ光榮を語つてゐるのだが、同時にこの言葉を聞いた人間がゐたといふ事は、言葉が共通な伝達物と化して不死の死となつたといふ不幸を語るものである」(傍点原文)と述べ

られていた批評家小林の認識と同様のものである。これらの言葉に見られる思想（ないし精神）と言語に関する小林の理解には、亀井秀雄氏がやく指摘した通り、マルクス撰取の跡が見られる。<sup>(13)</sup>たとえば、『ドイツ・イデオロギー』には次のような一節がある。

「『精神』は、不幸にも先天的に物質に『悩まされてゐる』。物質は、こゝでは、流動する気層の、音響の要するに、言語の形で表はれる。言語は意識と同年である。——言語は実際の意識、即ち、他人に対しても存在し従つてまた私自身に向つても存在するところの現実な意識である。そして言語は意識と同じく、〈交通〉他人と交通の必要、即ちその緊切を待つて初めて発生する。」<sup>(14)</sup>

また、言語の流通に関して小林は先の「アシルと亀の子Ⅳ」で、言語と商品の類似性に触れた後、「事物が言葉に翻訳される時、その言葉も亦一事物であるから、その言葉が、人類の共有の財産として固定する以前に、その一事物たる全貌が直覚されねばならぬ。人は『石』といふ言葉から、世に一つとして同じ石がないその一つの石の存在に到りつく時、世に一つとして同じ音声を持たぬ一つの石といふ言葉を発見するだらう」と、言っていた。

発信者から受信者へ言葉が伝達されるとき、伝達される以上、ズレや誤解があるとしても、両者の間で言葉の意味はとりあえず共有される。また、ある発話においてある語が生産する意味と、他の発話において同じ語が異なる意味を生産することは、珍しくない、というより、厳密に言えば、同じ語であったとしても発話ごとに異なる意味を生産しているはずである。しかし、発話ごとに差異が生じるとしても、親や教師あるいは辞書などによって「共有の財産として固定」された、制度的ないし公約数的な意味が、個々の発話の語の意味に干渉していくこととなる。こうした言語理解は、たしかにマルクスが商品进行分析する際に見せた論理といくつかの共通点を持っている。

周知のように『資本論』の冒頭では、商品が当初それを交換する者同士の間でそのつどの交換価値が共有されることで流通していた状態から、交換価値がある一つの商品（貨幣）によって表現されるに至る過程が分析されている。小林は、いわば、貨幣によって表現される価値形態ではなく、個別のモノが、個別の使用による個別の使用

価値を持つにもかかわらずなお交換される場合の、価値形態に眼を向けることを要請しているのである。しかし、恋愛関係が特殊な人間関係であるように、そのような商品の交換も貨幣経済の下では例外的な事態であるだろう。使用者が異なれば、使用価値も自ずから異なるわけで、モノの、あるいは言葉の「一事物たる全貌」は、そうやすやすと「直覚」できるものではない。

言うまでもなく、言葉が流通しうるのは、言語体系を共有しているからであるが、個々の発話において生産される個々の言葉は、他の全ての発話された言葉と差異を持つ。したがって、同じ「石」という語であったとしても、その発話の中でその語の持つ意味作用は、他の全ての状況下において発せられるその語の意味作用とは自ずから異なる。しかし、この言葉の意味作用の全貌は、その発話とその発話以外の全ての発話を知ることによってそれらとの差異を明らかにするほかない道理であるから、その全貌を捉えることは殆ど不可能といってよい。だから、実際には、言葉の発信者も含めた受容者すべてが、それぞれの言語経験から自他の発話に関わり合い、それぞれ意味を生産することになるわけであるが、言語体系の共通性を信じる者は、ひとつの正統的な意味を主張するであろうし、差異を強調する者は受容者と等しい数の正当な意味を主張するであろう。無論、交換が成立する以上、無意味とはならない。

こうして、一つの言葉、一つの思想は、「共有の財産」と齟齬を生じさせないように、あるいは齟齬を生じさせながら、様々な色合いで人々に受け取られ、意味を生産しつつ流通していく。だから、「俺」は次のように言うのである。

「大衆はその感情の要求に従って、その棲む時代の優秀な思想家の思想を読みとる。だから彼等はこれに動かされるといふより寧ろ自ら動く為に、これを狡猾に利用するのだ。」

時代を代表する思想家の言葉が、その受け手達によって半ば恣意的に受容・再生産されつつ社会に流布していく事実の指摘である。

#### (IV) イデオロギー批判の方法

言語と思想の流通形態をこのように確認した後、「俺」は資本主義社会の老衰と新たな社会機構を待望することの正当性を言うが、続けて「かういふ時期に生れる支配的思想は当然極端に政治的であり、又その故に殆ど解きほごし難い欺瞞に充ちてゐる事も動かす事が出来ない」と述べ、同時代にはびこっていた政治至上主義的傾向を批判する。ただし、ここで誤解してならないのは、「俺」の疑惑が、思想の生産と流通に際して発生する政治主義的欺瞞に対するものであって、「政治思想」そのものに対するものではない、ということである。「現代文学の不安」(32・6)以来、小林がしばしば繰り返してきた「概念による欺瞞」という角度からのプロレタリア文学批判と同様の政治至上主義に対する批判である。「現代文学の不安」において、小林は次のように述べていた。

「私は如何なる政治形態にも政治家にもあまり信を置かぬ男である。だがさういふ男なみの倫理学はもつてゐる。私は諸君の情熱を少しも嗤つてゐはしないが、諸君を動かす概念による欺瞞を、概念による虚栄を知つてゐる。その欺瞞は諸君が同志との訣別に、同志の死に流す涙にも交つてゐるだらう。私は既に作品上で、如何に諸君が人間を故意に歪めて書いたか知つてゐる、愛情の問題を如何に不埒な手つきで扱つたかも知つてゐる。又実際に諸君がどんな恋愛をしてゐるかも、どんな奇態な夫婦喧嘩をしてゐるかも知つてゐる。社会正義を唱へつゝ、人間軽蔑を説く、これを私は錯乱と呼ぶのである。」

小林がここで、プロレタリア文学者たちの政治的主張に対して異議を差し挟んでゐるのでないことは明らかであろう。小林は、彼らの掲げる政治的理念と個々の表現や具体的な人間関係における行動とのズレを指摘し、ミクロの政治力学に対する無自覚な政治主義的鈍感を批判したのである。この点において、小林の「マルクス主義文学」批判は、政治的立場からする批判ではなく、あくまでも表現に関わる文学批判の一環として行われたものであった。だから、同じ文章で小林は次のようにも言うのである。

「青年にとつてはあらゆる思想が、単に己れの行動の口実に過ぎず、思想といふものは、いかに青年にとつて、真に人間的な形態をとり難いものであるか、(中略)私の貧しい体験によれば私の過誤は決して感情の過剰にはなかつた、自他を黙殺して省みぬ思想の或は概念の過剰にあつた。ものの真形を見極めるのを拒むものは感情ではなかつた、概念の支配を受けた感情であつた。今日の新文学ほど青年のあらゆる意地の悪さ、虚栄心を誇示した文学はない。社会的焦燥にかられ己れを忘れた理論が横行してゐる時はない。」

ここには、小林の言う「概念による欺瞞」が、政治意識によるものと自意識によるものという相違こそあれ、若い知識人達に共通する文学的課題であつたとの認識が示されている。むしろ、小林はプロレタリア文学運動にかかわる作家達と政治的立場を同じくしていたわけではない。しかし、こうした小林のマルクス主義批判・イデオロギー批判を、マルクスのと形容した柄谷行人<sup>(15)</sup>の直観が、小林の発想の一面を言い当てているのも事実である。マルクスは次のように言っていたはずだ。

「人々はその私生活の上で、或る人が自分自身に関して考へてゐるところ、云ふところ、彼が実際に何であり、また何を為すかといふこと、を区別するやうに、歴史上の闘争の場合には、吾々は一そう、諸党派の言葉と空想とを、彼らの実際の組織体と実際の利害とから区別し、その観念と、その実在とを区別しなければならぬ。」<sup>(16)</sup> (『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』)

人々の主張する理念と現にある彼らの表現ないし実在とのズレ<sup>(17)</sup>を指摘することによって、「概念による欺瞞」を撃つという方法において、両者は確かに共通点を持っている。しかしまた、両者の思考様式が全く異なるのも事実である。ここで小林のイデオロギー批判とマルクスのそれとの異同について簡単に触れておきたい。両者の差異を考へるに際しては、「文芸批評の科学性に関する論争」(31・4)の次の発言が参考にならう。

「芸術現象の分析に経済人なる仮定は、何んの足しにもならない。何んの足しにもならぬ、とは少々乱暴な言い方かも知れないが、芸術の背後に経済人ばかりが見付かるといふ言分に較べたら、ちつとも乱暴ではあり

ません。」

マルクス主義文芸批評が、批評対象である文学作品から、経済機構の分析や作者の政治的あるいは階級的意識ないしは無意識を探ることに血道をあげる傾向に対する批判であり、作品の多様性を犠牲にしない批評実践への呼びかけであるが、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』（聖マックス）にも、これと同様の発想を見ることが出来る。

「私有財産は唯だ人間の個性を疎外せしむるのみならず、物のそれをも疎外せしむる。土地と地代とは何等の關係もなく、機械と利潤とは何等の關係もない、地主にとつては、土地はたゞ地代の意義をもつのみである。」<sup>(18)</sup>

ここでマルクスが言っているのは、土地は商品として流通しうる限りにおいて私有財産となるが、土地の固有性は交換も売却もできないものである。にもかかわらず、地主は土地に、その地代という一属性のみを見て、土地の持つ他の様々な特性に対する認識を持つことができないでいる、ということである。限定された認識力・感受性によつて切り取られた対象の一面のみを理解することで終わり、対象のそれ以外の側面に対する感受性の欠如とそれによる対象の多様性に対する鈍感の指摘という点において両者は共通する。マルクスは経済学者の視点の一面性について同じ文章で次のように指摘している。

「私が私有財産を持つは<sup>(ママ)</sup>それを交易し得る場合にのみ限られる、然るに私の特性は絶対に、交易できない。私の上衣が私にとつて私有財産たるは私が少くともそれを交易、移転、若しくは、売却し得る場合にのみ限られる。右の上衣がこれらの属性を失ひ、ほろほろとなつても、なほそれは私にとつて、価値ある幾多の属性をもつことができ、否、私の属性となり、そして私をほろを着た個人たらしむることが出来る。けれども、それを私の私有財産の中に数へることは如何なる経済学者の念頭にも浮かばないであらう」(傍点訳文)

経済学によつては対象化できない価値についての指摘であり、ここに見られるマルクスの経済学批判と先の小林のマルクス主義批評批判とは同じ形態をとっていることが認められるだろう。しかし、マルクスの発言は、私有財

産が人間の個性や物の個性を疎外しており、人が全的人間となるためには私有財産が止揚される必要がある、という初期マルクスのキーコンセプトである疎外論から切り離して理解することはできない。哲学・経済・政治が連動するマルクスの思考はあくまでも体系的である。それに対して、小林の思考には、体系化への指向は全く見られない。「文芸批評の科学性に関する論争」においてもマルクスが援用されているが、ここではマルクスの政論家・革命家的な側面は切り落とされている。小林の眼は、決してマルクスの思想体系へ向けられることはない。小林によつて提示されるマルクス像がモラリスト的風貌を帯びるゆえ<sup>(19)</sup>である。

そのようにして政治性、党派性を排除したマルクス理解によつて、小林は文壇的対立を易々と乗り越え、プロレタリア文学と芸術派との対立について「諸君の喧嘩の基底に於いて、文学は昔乍らの感傷と素朴とをもつて是認されてゐる点で、プロレタリアの諸君も芸術派の諸君も同じに私には見えるのだ」(「アシルと亀の子Ⅱ」30・5)と、左右の文学イデオロギーを等しく批判することから始めることができる<sup>(20)</sup>。そして、プロレタリア文学、新感覚派、新興芸術派等のグループに対して、小林は文壇登場以来、そのどれにも与しない発言を繰り返してきた。ある党派に対して別の党派的立場から対抗するという意味での「政治」的場に立つことを、徹底して避ける、小林の文芸批評におけるスタンスは、「私小説論」(35・5・8)に至るまで変わらない。しかし、プロレタリア文学側は、登場時の小林をブルジョワジーの立場にある批評家として位置づけ<sup>(21)</sup>、その政治至上主義と党派性が徐々に先鋭化されていくにつれ、ブルジョワイデオログとして敵対視するようになっていき<sup>(22)</sup>、新興芸術派側は小林に流行に対する無理解や古さを指摘する<sup>(23)</sup>一方で自陣営の理論家として期待するようになっていった<sup>(24)</sup>。文壇の政治もまた、政治の必然に従つて、小林の意志とは関わりなく、彼を党派的対立に巻き込んでいったのである。そうした状況に置かれていた小林は「Xへの手紙」の「俺」に、次のように語らせている。

「俺は政治の理論にも実践にもなんの積極的熱情を感じないのだ。俺はどんな党派の動員にも応じない。俺は人を断じて殺したくないし人から断じて殺されたくない。これが唯一つの俺の思想である。だから必度流れ

弾にあたつて犬の様に死ぬだらう。流れ弾なら何処から打ち出した弾であらうと同じ事だ。」

自身が党派に属さなくとも「流れ弾」には当たらざるをえないという「俺」は、党派からいかに逃れようとしても、「政治」の力学からは解放されないことを知っている。このような「俺」を描く小林は、政治から超越した、<sup>(25)</sup>あるいは政治的に中立な、<sup>(26)</sup>文学的場があると信じていたわけではない。従って、小林は政治を超越した〈純〉文学的な場を仮構し、そこから政治一般を批判するという、芸術派がしばしば採用するマルクス主義文学批判の方法を採用することはない。小林の批判は、先に見たように、思想の生産と流通過程における言語機能の分析を基底にしているという点で、芸術派の楽天的な政治批判とはまったく異なるものだったのである。そうした小林のマルクス主義文学批判を、文学的と呼ぶことは可能であるとしても、それが言語の流通と思想の再生産の場にはたらくミクロの政治力学を意識化することによってなされたことは記憶しておく必要がある。

☆注

- (1) 河上徹太郎「小林秀雄論」〔『小林秀雄全集』全八巻・解説 新潮社 55・9〕57・5
- (2) 杉山平助「文芸時評」〔『国民新聞』32・8・31〕
- (3) 河上徹太郎「理知と小説について」〔『文芸春秋』32・10〕
- (4) 大岡昇平「小林秀雄の小説」〔『小林秀雄全集第二巻』解説 50年刊〕
- (5) 中村光夫「人と文学」〔『現代文学大系小林秀雄集』筑摩書房 65・5〕引用は『《論考》小林秀雄増補版』(筑摩書房 83年刊)によった。
- (6) 三好行雄・山本健吉・吉田精一編『日本文学史辞典近現代編』(角川書店 87年刊)
- (7) 関谷一郎「小林秀雄・その転位の様相」〔『国語と国文学』80・4〕
- (8) 檜原修「『X』への手紙」論〔『国語国文論集』81・3〕

- (9) 「私小説」は、読みのモードによってそれと特定されてきた流動的なものであり、小説自体に内在する属性によって定義されたものではない、という鈴木登美『語られた自己』（岩波書店 2000年刊）の指摘は正確である。
- (10) この問題に関わる考察については、末木剛博『論理学概論（第二版）』（東京大学出版会 74年刊）を参照した。
- (11) 吉田熙生「『Xへの手紙』覚書」（『静岡女子短期大学国語国文論集』76・1）が、「『批評家小林秀雄』という枠」（傍点原文）の重要性について言及している。
- (12) ただし、生身の小林秀雄が批評への確信を「僕はこの頃やつと自分の仕事を疑はぬ信念を得ました。やつぱり小説が書きたいといふ助平根性を捨てることが出来ました」と語るのは一九三六年十二月の志賀直哉宛書簡まで待たねばならない。批評家小林秀雄が生身の小林秀雄を克服するに要した時間である。
- (13) 亀井秀雄『小林秀雄論』（塙書房 72年刊）。この点については、西村将洋「貨幣／言語そして同一性の彼方へ」（『日本文学』99・11）の考察もある。
- (14) 改造社版『マルクスⅡエンゲルス全集』第15巻（30年刊） マルクスのテキストは、本稿では改造社版全集を用いる。
- (15) 柄谷行人「近代日本の批評・昭和前期Ⅰ」（『季刊思潮』89・7）
- (16) 改造社版『マルクスⅡエンゲルス全集』第五巻（28年刊）
- (17) このズレが小林自身の批評の方法として採用されている「当麻」（42・4）について、かつて検討を加えたことがある。拙稿「小林秀雄の再検討」（『昭和文学研究』98・2）
- (18) 改造社版『マルクスⅡエンゲルス全集』第七巻の二（31年刊）あるいは『経済学・哲学草稿』における鉱物商人の例話を思い浮かべてもよいだろう。

- (19) こうした小林の見方は、「人間にとつて最も捨て難い根性といふ宝を捨て切ることが出来た達人」(『マルクスの悟達』(31・1) というマルクス評などにもうかがえる。
- (20) 文壇登場時点で既にこのような意識を小林が所有することができていた経緯については、拙稿「昭和初期批評の場所」(『恵泉女学園大学人文学部紀要』2001・1) で考察した。
- (21) 青野季吉「文学批評の全体性のために論ず」(『新潮』30・9) ただし、この時点ではプロレタリア文学サイドにも平林初之輔のように小林に対して一定の評価を加える者もいた。
- (22) 宮本顕治「小林秀雄論」(『改造』31・12)
- (23) 阿部知二「流行について」(『読売新聞』30・5・6) 龍膽寺雄「顧望録」(『近代生活』30・12) など
- (24) 龍膽寺雄「新人に」(『新文学研究』31・7)
- (25) 例えば、横光利一「新感覚派とコンミニズム文学」(『新潮』28・1) は、資本主義とマルキシズムのいずれに与するかその意志さえ動かす必要のないものとして、科学と文学を挙げて、政治から超越した性格を文学に与えていた。
- (26) 龍膽寺雄「文芸時評」(『近代生活』30・3) は、芸術派の思想的立場について、左右のいずれにも若干の肯定と否定を示すとしている。